
休み時間

十田 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

休み時間

【Nコード】

N7595P

【作者名】

十田 心

【あらすじ】

何となく人気の少ない場所を探してたどり着いたのは、倉庫と化してほとんど誰も近寄らない資料室。ここで二人の中学生が出会い

最初は暗くシリアス風味ですが、のちに続ける短編は結構ほのぼのとした日常が多い（はず）です。

昼休み（前書き）

この内容は少々重たい話です。

昼休み

昼休み 生徒がそれぞれの昼食を楽しみ、賑わう時間。

そんな中、学校の隅に位置する資料室だけはひっそりとしている。

昼間でも薄暗く、ヒンヤリとした空気。夏場では湿気が籠もる。普段から使われなさそうな物ばかりが置かれていて、資料室というより倉庫か物置のように扱われている。だから置かれている物の扱ひも存外で、物が平気で山積みにしてあったりもする。人が居ても物陰に隠れてすぐには気付かない。そう、だから、それを利用するやましい者は少なからずいる。

「何してるんだ？」

資料室の奥、入ってもすぐには見えないような場所に、そいつはボロボロな制服を纏い、乱雑に置かれてある荷物の間で窮屈そうに大の字に寝ていた。数度叩かれたような痕がある顔で自分をゆっくりと見上げてくる。

「充電。そっちこそ何しに来たの？」

同じ様なものだと答えて、近くに座り込んだ。

「………なんで、そうなったんだ？」

「今の状態のこと？それとも状況を言ってるの？ まあ、こんな状態なんて好きこのんで自分でやるような人はそうそういないか。制服高いし」

問いかけを投げながらも自分で納得し、目を瞑って暫く無言になった。

「最初はこうじゃなかったんだけどね。私の友達が被害に受けてたの。それを止めようとしたら生意気だつて事で、ターゲット変更されたわけ」

全く、連中も暇人だよな。とそいつは少し笑った。

自分には何でそこで笑えるのか分からない。奴等を皮肉るように笑うならまだしも、そいつは。

「おまえ変態か？」

「失礼な。何でそういう考えに辿り着くわけ？」

そいつは皮肉る笑いでも悲しい笑いでもなく、心底楽しそうに笑ったから。

「あー、なんだか笑うとき他の感情とかと一緒に出ないんだよね。

苦笑とかもどうやって出るのやら分からないし」

「それって得だな。作り笑いは不要か」

「そうでもないよ、これが。笑いたくないときはとことん笑わないからさ。でも今は笑うよ。笑えるんだ。連中の前で、思いつきり。

笑ってやると気に入らなさそうにしたり、罪悪感を覚えて青くなったり、連中の顔色が面白いほど変わるからね」

悪趣味な奴だ、と思った。あちらに対して間接的に返す、か。直接的にやり返される方があちらにとっても言い逃れも出来るし理由にもなるだろうが、そんな仕返しにもなりそうにない返し方なんぞされたら、あちらもやりにくいだろう。

「気に入らないっていう顔する人はさらに何かしてくるけどね」

「無視された方がよっぽどマシなんじゃないか？」

「ん〜……最初はそんな感じだったんだけど、しつこく話し掛けたらあつちが折れた」

で、シカトは意味無いから直接的に移したと。

「変人だな」

「変人ですよ〜」

認めるのかよ。

「変態だな」

「変態じゃないから。しつこいよ、根暗君」

根暗と言われて瞬間ギクリとした。何かが冷たくなっていく感じがする。

「根暗じゃ、ない」

いきおい、語調が少し強くなったかもしれない。けれどそいつはただ、ふ〜ん、と言って少し黙った。が、すぐにまた口を開いた。

「君もあの人達と同じ口みたいだね。相手のことを少しからかう気持で、軽い思いで、何かを言って、自分はそれを受け入れないでムツとする。それって矛盾してるよね」

まっ、人はそういうもんだし、世界は矛盾だらけ〜。とそいつは言った。

「………だったら、だったらお前はどつなんだよ?」

矛盾、矛盾、世の中矛盾だらけ。と、意味不明な歌を歌っているそいつに聞いた。……こんな奴に聞いてまともな答えが返ってくるのだろうか。

「ん？」

「だから、お前は矛盾しないのかよ」

「相手とか話とかその時によるよ。親しくなればからかい合う事なんか一つや二つどころじゃないくらい出てくるだろうしね。親しくても真剣に話してるのに茶々いれてくるのは嫌だし。言葉を使うのは少し気を付けてるつもりだけどね、いくら気を付けててもそんなのいくらでも起きるものだよ。さっき言ったよね？ 人はそういうものだって」

こいつは………意味不明な歌を歌ったり、悪趣味な仕返しをしたりしているが。

「お前、本当に中学生かよ」

「しつづれいだね、君は。私はれっきとここに在校する二年生ですよ」

しかも同学年だった。……奇行に走るかと思えば、自身なりの考えをちゃんと持っている。それが同じ年とは思えないほど上に見えたり、下に見えたり……。

「やっぱり、変人だな」

「変人ですよ」

「将来は詐欺師か」

「いやいやいや、乙女は常に詐欺師なのですよ」

……ごめんなさい。悪かったから、謝りますから許して。

そこは反論してください。

「あはは、冗談だよ」

……世の中の女子がこいつみたいだったら絶対嫌だ。恐ろしい。

話をしててこいつが乙女だなんて欠片も思えない。

「さつてと、充電完了！」

そいつは反動を付けて半身を起こして、伸びをした。

「そろそろ昼休みも終わる頃だし、戻らないとね」

「その格好で戻るのか？」

「もつちろん。私は特にやましいことをしてるって思ったことないからね。っていうか、理由こそ曖昧なのに何でこっちが隠れて怯えなきゃならないのさ」

強いな、と思った。うざいな、とも思った。輝いて見えて、それが疎ましく見えて。それがこいつの周りの状況を作る理由ともなるのだろうとも思った。自分とは違う疎ましさ。自分の周りの状況と似て、異なるもの。どうして、こいつはそんな風に考えられるのだろうか。

「んん？ 何その顔？ 言いたいこと有るならば、はっきりと！」

そいつの満面の笑顔が眩しく見え、思わず下を見てボソリと言った。

「どうして、そんな風に考えられるんだよ。どうしてそんなに、強

いんだよ？」

「んん？ 後ろ向きに考えても仕方ないから。というか、ただ考えたくないだけ。強くなんて全然ないよ。逆に聞くけど、？強い？つて何？」

「あいつらに、そうやって立ち向かえることがだよ」

何を聞いてくるんだと思うと、そいつはうんと唸った

「立ち向かっていると買ったことないよ。そうじゃなくて、私が言いたいのは？強い？つて色々あると思うつてこと。考え方によっても色々だね。例えば、君も、？強い？」

何を言ってるんだ？ 自分も？

「よく知らないけど、君はあんまり自分のこと言わないから、多分何か言われてもあまり言い返さないんじゃない？」

確かに、その通りだ。何かを言われても、やられても、口に出せない。つまりは臆病な奴だ。それが何故強いつていうんだよ。

「それってさ、あてはまりにくいかもしれないけど、我慢強いつてことじゃないの？もしくは忍耐がある。それは十分に？強い？と思っつよ」

………ものは言いようだな。だけど、そんなの強いなんて思えるかよ！

「んん、八つ当たりされても困るな。精神的な？強さ？なんて、所詮自分の持っていないものが相手にあつたとき、羨ましがってそう

言うものなんだろうって私は思うだけだからさ。あと、相手もそう思うかもだから、軽々しく？強い？なんて使っちゃ駄目だよ」

私も考えない事で、逃げているだけだしね。とそいつが呟いた。

「そうそう、ここ倉庫みたくなってんだけど、自殺の場所には不向きだよ。それとお節介だろうけど、嫌な奴のために死ぬ事なんてないよ。死んでも何も変わらないし、あいつらだって何も変わらない。君という存在が記憶から薄れて消えるだけ」

何の重みもなく、たださりと云われたことに、何も言えなかった。どうしてここに来た理由が、使用目的が自殺と思ったのだろうか。最近、半分、なんとなくちらりとでも思っていた事柄。そいつの言葉を聞いて背中がうすら寒くなった。

「まっ、私が出たら、あの人は今以上に罪悪感に苛まれるだろうね。とりあえず、今はなにをしているかだけ、自覚してくればそれだけでいいけど」

お気楽に、愉快に、笑いながらそいつは資料室のドアに手を掛ける

「んじゃ、またね」

そいつは何の混じりけもない笑顔をこちらに向けて、手を振って出て行った。

「また、か……」

また、あいつと会えるのだろうか？いや、同じ学年だし会える機会はあるだろうが、また、さっきのように話ができるときが来るの

だろうか？

そういや……名前聞くの、忘れてたな。

ボンヤリと、昼休みの終わりを告げるチャイムを聞きながら、そう思った。

女の子ver. (前書き)

蛇足的なものです、昼休みの女の子視点です。

私のコレは、多分生まれつきなのだろう。

昔からとにかくよく笑う子、と周囲から見られていた。オトナもコドモも。私も確かによく笑っている自覚はある。だからといって喜怒哀楽が欠けているわけでもなく。けれど、他人の目に映っている私を知ったのは、言われていた言葉の意味が自分の中で解釈出来るようになったのは、小学校の高学年辺りだったように思う。

何の話をしていたのか、もう忘れてしまった。三年生から一緒に級友が複雑そうな表情をした。見せられたその表情　笑い方に疑問を持ち、方法を聞いてみた。級友は、私には不思議で興味を惹かれたその複雑な表情を顔に付けて、答えた。

『ごめんね、分かんない。　ちゃんこそ、どうしてそんな風に笑ってるの?』

『何で?　楽しいから笑うんでしょ?』

『あのね……みんな、　ちゃんの笑顔のこと不思議に思ってるよ』

『どうして?　みんなも笑うじゃない』

『　ちゃんは絶対に何でも楽しそうに笑うから……』

最後の級友の言葉は小さい声だった。クラスの喧噪に負けて消えそう。

後日、彼女は遠くに引越して転校した。

それから私は何となく周りの表情を、特に笑い方について気を付

けて見るようになった。

小学校卒業までずっと観察していて分かったのは、笑い方には何種類かあるということ、私はマネをしようにもただ一つしか出来ないことだった。鏡に向かって、何回笑っても、手で引っ張っても多少引きつった同じ笑顔。

中学に入って暫く、小学校と違った雰囲気を味わい、友達も少し出来て生活を楽しんでいた。小学校の時よりも更に頻繁にみんなが表情豊かに笑うのを見て、ほんの少しの疎外感も感じていた。

あの頃（といっても、まだほんの数年前でしかない）は、自分なりに気になって悩んでいた。けれど今は、別に困ることもないからもう気にしないことにしている。

いや。寧ろ、今、私は 。

外の喧噪が遠くに聞こえる。静かすぎず、煩すぎない。校舎の隅に位置するこの資料室は、あまり日が入らなく、湿っぽい独特の臭いが薄く充満している。初めてここに来たときはもつと臭いが濃かったけれど、少し換気されるようになったからか、もう酷くは匂わない。

私は置かれている物が比較的少ない場所に寝転がって大の字になる。そして四肢を思い切り伸ばして目を閉じた。この定位置も最初は物が散らかり埃も積もっていて、来る度に少しずつ勝手に整理したり教室の端にあった布きれで掃除をした。その成果もあって、こうして気にせずに寝転がれるほどになった。

（さて。この制服の言い訳、どうしようか）

体育が終わって制服に着替えようとしたところ、スカートが無惨なことになっていた。所々ハサミかカッターのような物で切り破ら

れていた。前々から嫌がらせを受けてはいたし、隠れたところで何回か叩かれもした。けれど、家族や周りに笑って適当なことを言っ
て一応誤魔化していた。どこまで信じているかは分からないけれど、
そんなに心配そうにはしていない。でも、流石にコレを見たら・・・

ガラリ、とドアが開く音がした。閉める音も聞こえ、静かに奥の
こちら側に来る一つの足音が聞こえた。教師が来たかと思ったが、
こんなところの資料を使う教師はいない。ここは一種の物置場、廃
棄場だから。

「何してるんだ？」

瞬間に教師だったら面倒だなと思ったが、生徒でも面倒だなと思
った。一人で色々と考えたかったのに、隠れ家が見つかってしまっ
た。またどこか違うところを探そう。

「充電中。そっちこそ何しに来たの？」

見上げると、男子生徒がいた。こんなところに一人で来るとい
うことは、同類なのか。

「オレも同じ様なものだ」

男子は私の横の荷物が無い場所に胡座をかいて座った。そこはま
だ掃除していないから、制服が汚れるだろうな。私の足下も一応片付
いてはいるが、制服が制服だから座らなかつたのかもしれない。別
に下にスパッツをはいているから気にしないが。

「なんで、そうなったんだ？」

？何で？というのはこの制服の状態か、学校での周りの状況か。問いを問いで男子に返す。そういえば、本当の最初の発端は何だったんだろ。目を瞑って考える。いくら考えても他人の思考を読めるものではないことは分かっている。とりあえず、連中は暇人で、物好きだという結論。

小学校から一緒にまあまあ仲良しだった友達。その友達がクラスの子からイジメを受けていた。シカト、悪口、からかいの度を過ぎた行動。シカトが始まってすぐに気がつき、なるべく側にいた。そして私が邪魔で段々と悪質になる。

最悪の循環になりそうと思った頃、標的がこちらに移った。友達はこれによってイジメから解放されることになった

加害者側に移ることで。

別に、期待をしていた訳じゃなかった。助けたから助けてくれるなんて、甘い考えは持っていなかった。……。一欠片も思っていないかったという嘘になるけれど。

？私へのイジメの発端？それを追及されたら、その友達のことも話さなくてはならない。周りのオトナはほとんど何も考えない。煩わしい。当事者でないものが、ただ事実だけで騒ぎ立てる。そうではないオトナもいると思うが、そういう輩が多いと思っている。

この男子は、見たことがないから他クラスなのだろうし、訳ありなのだろうから教師に告げ口はしないだろうと推測して、友達が加害者に移ったこと以外、簡潔に話した。

「全く、暇人な人達だよ」

連中の機嫌が悪そうな表情、私には出来ない？笑う？表情を頭に

浮かべて、私は笑った。

「おまえ変態か？」

失礼な。私に変態なんて、さっきの話からどう繋がっていくの。男子はボソボソと私の表情について言った。

「あー、なんだか笑うとき他の感情とかと一緒に出ないんだよね。苦笑とかもどうやって出るのやら分からんし」

面倒くさい、そこまで解説しなくて良い、そう思うけれど場所が安心感を与えるのか、はたまた取るに足りない人物と認識したのか、話してしまっていた。もういいや。あんまり警戒しなくても。今まで見かけなかった顔であるし、他のクラスの生徒だ。今の周囲の情報網が途絶えた私にとって、違うクラスということは違う世界だ。

作り笑いをしなくて良いのって、得だな。なんて、お気楽な発言を男子はした。

そうでもない。笑いたくないときは、私だって笑いたくない。無理に笑ったら、私の笑顔じゃないから。

「でも今は笑うよ。笑えるんだ。連中の前で、思いっきり」

それが私のささやかな仕返し。気乗りしてない人、罪悪感を持っている人は私を見て少し青くなる。気に入らないと思ってる人は赤くなる。青と赤の対比。友人にも同じように笑う。

?良かったね。念願の仲間が出来て。?

心の中で言葉をつぶやいて。

「無視された方がよっぽどマシなんじゃないか？」

最初はね。でも

「しつこく話し掛けてたら、あつちが折れた」

シカトでへこたれる私ではありませんから。

「変人だな」

「変人ですよ」

「変態だな」

「変態じゃないから。しつこいよ、根暗君」

「……………根暗じゃ、ない」

「……………ふん」

根暗君、なんてふと出てきた言葉。さっきからあまり表情が変わらないし、人を変態呼ばわりしているのだから、軽口のもりで言い返したのに。この人は、この人のクラスでそう言われてイジメられてるかもしれないけれど、そんなの知ったことじゃない。

「君もあの人達と同じ口みたいだね。相手のことを少しからかう気持で、軽い思いで、何かを言つて、自分はそれを受け入れないでムツとする。それって矛盾してるよね」

問いかけてなく、断定的。同じ様な立場にいるのなら、それを欠片でもいいから認識して貰いたいと思うから。認識してもどうにもならないことはあるけれど……………。

「まっ、人はそういうもんだし、世界は矛盾だらけだけどね」

矛盾、矛盾と自分でも意味不明だと思つたことを口ずさんでいると、男子が何かを言った。

「だから、お前は矛盾しないのかよ」

そんなことはない。いつだって、時と場合、している話による。言葉を選ばなきゃいけないときだって沢山あると思つたら。

「いくら気を付けてても、そんなもの幾らでも起きるものだよ。さつき言つたよね、人はそういうものだって」

ジツと、男子が難しそうな顔をしながら睨みつけるように私を見た。

「お前、本当に学生かよ」

「しつづれいだね、君は。私はれっきとしたここに在校する二年生ですよ」

同学年なのかよ。と、その人が呟いて、何故か俯く。あー、学年知らなかったけど、あまりに頼りなさそうだったから、後輩か？とちは思っていたよ。ゴメンね。

しばらくして立ち直つたのか、この資料室に来た初めより、何かが少し柔らかくなったように思えた。

「やっぱり変人だな」

「変人ですよ」

「将来は詐欺師か」

「いやいやいや、乙女は常に詐欺師なのですよ」

……嫌そうな顔された。

「あはは、冗談だよ」

いつの間にか自分の心が軽くなっているのを感じる。今日は一人じゃないことに煩わしさを感じてたのに。もう、ここでの休息は不要かな。この人の気配も随分変わったように思えるから。

「さつとと、充電完了！」

弾みを付けて、身体を起こして伸びをする。ほんの少しかびくさい空気を一杯に吸う。

「その格好で戻るのか？」

もちろん。別に私自身はやましいことしてない。何でこっちが隠れて怯えなきゃならないの？

そう言うと、その人は何かを言いたそうな、恨めしそうな表情をしていた。

「どうして、そんな風に考えられるんだよ。どうしてそんなに、強いんだよ？」

「強い？つて何のこと？ 私は………逃げているだけなのに。」

前向きになることで、問題を見ないようにしてるだけで。

「逆に聞くけど？強い？つて何？」

その人は立ち向かえること。と言った。私は立ち向かってるつもりなんか全然ない。立ち向かっていたら友達に向かって笑ってない。

もつとも残酷な仕打ちだと自分でも思ってる。思い詰めて自殺しないだろうかと、今さら、最近になって考える。

人一倍寂しがりやで、仲間に入れて貰うためには加害者に移るしかなかった。仕方がない。許されることでない。あの子も自身の中で葛藤があるかもしれないのに。見ないふりをして、残酷なことをしている。

この人にただ私は強くないと言っても、納得してくれないだろう。だから、よく考えながら話した。

「そうじゃなくって、？強い？って色々あるって思っつてこと。考え方によっても色々よね。例えば、君も？強い？」

よく分らないし、これ以上は当てずっぽう。推測だ。でも、私の勘は当たるほう。

「よく知らないけど、君はあんまり自分のこと言わないから、多分何か言われてもあまり言い返さないんじゃない？ それってさ、当てはまりにくいかもしれないけど、我慢強いつてことじゃないの？ もしくは忍耐がある。それは十分に？強い？と思っつよ」

私だって、何も仕返しをしないでいれば。負の連鎖をここで止められればと、壁となつて耐え抜けたらどんなにいいだろう。現実には、飽きられれば次の標的を探されるだけだけれど。

「ものは言いようだな。だけど、そんなの強いなんて思えるかよ！」
「んん、八つ当たりされても困るな。精神的な？強さ？なんて、所詮自分の持つていないものが自分にあつたとき、羨ましがつてそう言つものなんだろうって私は思っただけだからさ。あと、相手もそう思っかもだから、軽々しく？強い？なんて使っっちゃ駄目だよ」

そう、私はあなたの？強さ？が羨ましくも思えるから。それなのに私を強いと言われても、複雑になるだけだ。

少し落ち着くのを待って、付け足すように言う。

「そうそう、ここ倉庫みたくなってるけど、自殺には不向きだよ。それとお節介だろうけど、嫌な奴のために死ぬ事なんて無いよ。死んでも何も変わらないし、あいつらだって何も変わらない。君という存在が記憶から薄れて消えるだけ」

自殺するつもりで来たかどうか知らないけれど、最初に顔を見たとき相当参っているなと思った。友達のこと色々と考えたからかもしれない。私は自殺しない。出来ない。

「まっ、私がやったらあの人はそれ以上に罪悪感に苛まれるだろうね」

とりあえず連中のことかな。何をしているか、自覚して貰いたいだけだね。

「んじゃ、またね」

少しの間、話し相手になってくれたその人に手を振ってあっさり資料室を出て行った。

また会うか分からないけど。少なくともココには来るのを止めるつもりだけだ。

「また、なんてあるのかな」

とりあえず、お互い山積みの問題を何とかしないとね。

今度会つとしたら重たくない話をしたいな。

番外 学外時間 入学式

春。春といえば行事も何かとある。が、学生の行事といえばやはり卒業式と入学式は一大イベントであろう。ただ送る者、迎える者にとっては退屈に思える者もいるだろうが。

自分はある学校の門前に立っていた。門の周りには桜の木が植えてあり、花は既に半分くらい散っていた。そして門前には 入学式と大きく書かれた板が掛けられていた。今年からこの学校へ入学するのだなど、自分には珍しく感慨にふける。立ち止まっているのは自分だけで、後から後から人は門に吸い込まれるようにくぐっていく。そろそろ自分もその流れに乗ろうと一歩を踏み出そうとしたとき。

「ひっさしぶりー！」

威勢の良い声と、背中中の張り手に吹っ飛ばされた。

「おおっと、ゴメンゴメン。でも君のリアクションでっかいね〜」

リアクションじゃないから。吹っ飛ばしたのお前だから。というか誰だよ？

新しい制服についた汚れをはたきながら立ち上がると、女子生徒が立っていた。

「いやー、君もこの学校なんだね」

ニコニコと楽しそうに笑う姿。その姿は一年以上前に見た彼女とだぶった。

「もしかして、あの時の……?」
「そうそう。倉庫の中で寝てた、あの時の」

卒業したあの学校にある、資料室。資料室とは名前だけで、倉庫のようになっている教室。そこで大の字になって寝ていた彼女。お互い知り合いというわけでもなかったのだが、あそこで彼女と話した内容は忘れにくいものだった。あれから時々は学校で見かけたりするも、すれ違うことは無く、挨拶もすることはなかった。接点もあの会話きりで。

「何かあの時と違う気がするんだけど」

「そう? 元はこんなもんだよ。根暗君」

「根暗じゃないから、悪趣味さん」

「ひどっ! だって君、あの時全然喋らなかったでしょうが」

「あんたが一人で喋ってたからだろ」

門前で言いあっていると、人の流れが滞りはじめたのに気がついてゆっくりと歩き始めた。

「君が私に質問ばかりしたからでしょうが。律儀に答えてあげたんだよ、私は」

彼女も歩調を合わせて隣を歩く。

「いやー、しかし君も一緒か。何やら学生生活が楽しくなりそうな予感がするよ」

自分は何やら疲れそうな予感がする。あの時の彼女の会話、そして先程の再会。けれど、確かに楽しくなりそうである。笑うときに余計な感情を入れられない彼女。心底愉快そうに、楽しそうに、気

持ちの良い笑顔で。少し性格が悪い気がするけど。少し力が強い気がするけど。きっと一緒にいるんだろっなと思った。

「クラスとか違って、これから三年間よろしく！」

またもや彼女は背中をバシッと叩いた。

「お手柔らかに」

これから起こすだろっ彼女との厄介な出来事と新しい学校生活は少しの痛みと驚きより始まった。

番外 学外時間 入学式（後書き）

そして彼は三年間彼女と同じクラスになり、事あるごとに何かしら巻き込まれることになった。

また、いつの間にか彼の妹も、彼女の従妹と友達付き合いをしていて知らないうちにはほ家族ぐるみな関係になってたり。

学外 卒業式（前書き）

番外 学外でその2です

学外 卒業式

「今日もいい天気だ、飯がうまい！」
「確かに晴天だが、どこに食事がある」

ついに幻影を見るようになったかと思いつながら、いよいよ日々旅立ちと暢気に口ずさんでフラフラしている彼女を見やる。

「しかし、よく倒れないで卒業式参加できたな」

三年生を送り出して簡単な片付けをした後だから、時間も昼過ぎている。

「もう麻痺して空腹感じないけどね」

寝坊して朝食を摂らなかつた所為らしい。卒業式が始まるギリギリの時間に滑り込んだ彼女は、式の合間にある沈黙の時間に盛大な虫の音を鳴らした。だが本人に至ってはあまり気にしていないようだった。

「お腹の虫って盛大に鳴らしても響かないもんだと思っていたんだけどな」

「そりゃあ普通はな。普通は少し離れている俺の所までハッキリ聞こえない。」

「ホント、お前といると普通が色々覆されるよな」
「いやいやいや、何をおっしゃるウサギさん」

誰がウサギだ。俺がウサギならお前は何様だよ、カメ様か。
.....ごめんなさい。

「私には最初から普通という言葉は無いのですよ。普通なんて人間が勝手に決めた曖昧なもの。なんて、そんなのどうでもいいから言わないけどね」

便利な言葉であるけれど、大衆一般でない特別であるのが異常に見えて大嫌いであるってことを表すモンだから？ まあうん。そのうんちくについて置いとくとして。

「そりゃ、最初っから普通じゃないのは何となく分かってたけどな。悪趣味だし」

「知らない人に誤解与えるから止めてくれないかな、根暗君」

軽口に軽口で返す。悪口で悪口を返す。別に悪気がある訳でもないし、喧嘩してるわけでもない。でも初めて彼女と出会ったとき。同じように悪趣味と言い、根暗君と返されたときはムツとしたのだが。人間、慣れた。ここの学校の入学式の時も、入学してから今までも同じ様なやりとりをし、こういう応酬をすることにすっかり慣れてしまった。

「誤解でもないだろ。性格の悪さは」

「残念。性格の悪い人には態度が変わるのです。目には目を。ハンムラビ法典万歳！」

「まあ、表情の方で損が多いから仕方のないことかもしれないけど「コレには苦労しますよ」

彼女はニツコリと楽しそうな笑顔を作って、自分の顔を指した。

何故か、彼女は笑顔に何の感情であろうと一緒に表すことが出来

ない。それを聞いたときは何となくいいなあ、と思った。けれど、実際同じクラスで一年間過ごしてみると、案外損な役回りばかりのようだった。

「別にねー。コレのせいで問題が起きたってしようがないからね。これが私って思ったら、思われたらそうそう変わらない。変えられない。変われるとしたら、卒業して一区切りつけたいときが好機だよな。私もここに上がる前と今の自分、少し変えられたからね」

まあ、確かに。あの時は陽気そうに話してたとはいえ、どこことなっかけりがあった。当然といえば当然か。資料室という名だけの倉庫に、ボロボロの制服で「充電」と称して大の字に寝転がっていた彼女。同類であって同類でなかった。彼女の言葉をかみしめて過ごしたあの頃の生活。

「ところで……唐突に話変わるけど、お前の帰り道違わないか？」

俺達の家は学校から少し遠いが同じ地元だ。だから時間が合えば、大体途中まで一緒になる。今日はいつの間にかいつもは分かれる道を過ぎていた。

「ん？ あー、飢死にしそうなので恵んでください」

それが目的かよ。つか、空腹は麻痺したんじゃないかなかったか？

「金ない。無理」

「じゃあ手料理。前に流華ちゃんから聞いたよ、すごく美味しいって」

流華^{るか}……。いつの間に交流深めてたんだよ、あいつは。他に何か話してないだろうな。いやあいつだつて身内の恥を言い触らしたりはしないはず。うん、ここは妹を信じて……。

「大丈夫だよ。恵んでくれないからつて恥ずかしい過去を言い触らしたりしないから」

「裏切り者おつ！ ちくしょう、分かったよ。喜んで作らせていただきますよ」

「あはは、ありがとう！ 真緒も呼んでこようかな。流華ちゃんと一緒に遊ぼうつと」

真緒ちゃん。頼むから君の従姉や俺の妹のようにならないでいてほしいよ。

ホント、切実な思いで。

去年の入学式の際に予想した彼女に振り回されることは、妹にも手を組まれてレベルが上がってしまったようだ。ほんの少しで良いから平穩をくれないだろうか。それとも、これが平穩で俺の日常なのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7595p/>

休み時間

2010年12月31日06時40分発行